

1984年 10月10日

毎月10日、25日発行

第71号 6頁200円

定期購読料(1部22回)
手渡し 3000円/開封 3500円/密封 4000円

万国の労働者、被抑圧民族団結せよ！

(1980年2月28日第3種郵便物認可)

赤旗

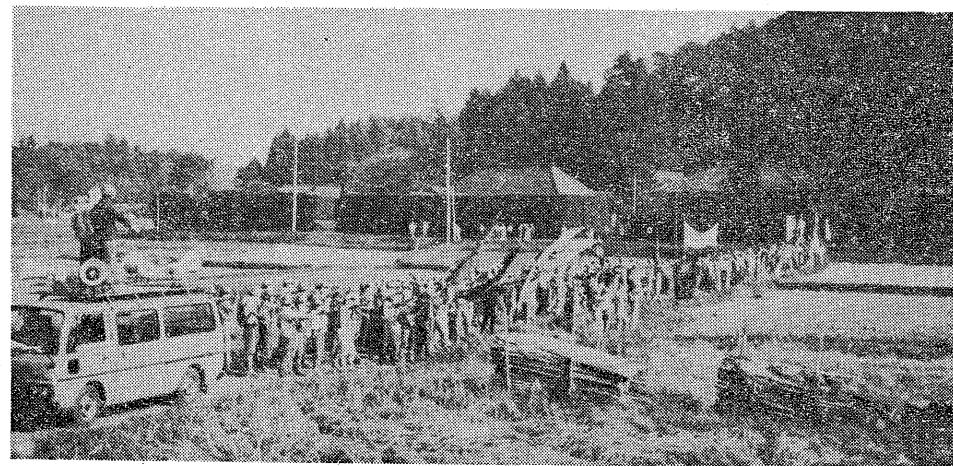
共産主義者同盟中央機関紙

東京都新宿区西新宿3-5-3-406
電話(03)349-8598 東京7-86947
編集・発行人 北沢晋

関西赤路社
大阪市福島区大通1-19-13
副島ビル 電話(06)462-7030

朝鮮、アジア人民と連帯し

侵略と農地略奪の二期実力阻止



全国の同志諸君！

敵の用水強行着工によって、二期の戦闘は開始された。反対同盟は、東部藩の唯一の反対派地権者小川進さんの中を張つて陣取り、警察権力の重包圍をもとのめざす、「五一以降一週間の連続闘争」を開いた。労働者・学生も反対同盟一派に、連日奮闘した。五十六名にのぼる農民、支援が不當にも逮捕された。

敵の路線転換へ、具体的な暴力的攻撃として現れた最初のものとして、用水着工が強行されたのである。用水着工のものは、

暴力的暴行

に対する

闘争

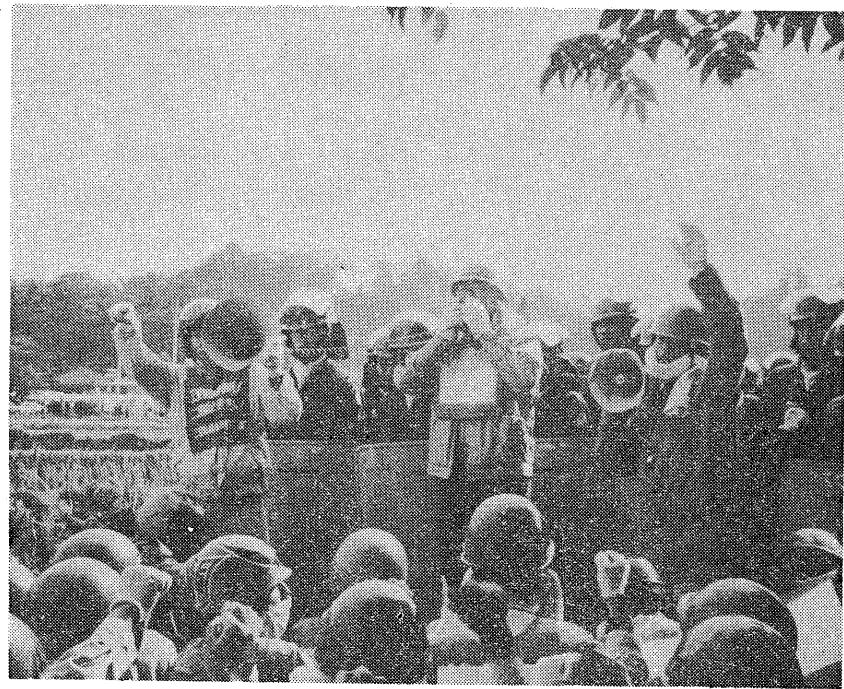
を打ち回めること

である。

暴力的暴行

に対する

・着工宣言を迎え撃とう!



反対同盟、支援は体を張って一週間闘い抜いた。写真は機動隊の不当弾圧、逮捕をはねのけ、成田用水着工阻止に決起する労働者・学生

九月二十五日、六名の機動隊に守られ、成田用水菱田工区はついに用水の本格着工を行った。下流の住民部落からクライ打ちと重機導入をはかつた。用水は一期工着工攻撃と一体のものである。これに対し、反対同盟農民、支援は体を張って断固とした闘いを一週間打ち抜いた。闘いの火が切つておどされた。一期着工宣言を迎えた臨戦体制を急ぎ構築しよう。

阻止線にむけ肉弾戦

9月25日～26日

着工初日の二五日、機動隊はも昇らぬ朝の四時過ぎから菱田区域、とりわけ東部路を完全に制圧した。農民の生活道路に装甲車や放水車が何台も並び、當日の検問の厳しさは幼稚園のスクールバスすらも部族の中に入れなかつたほどである。さいに私服刑事は、ナチス様と共に拳銃をも所持して警備にあつた。

このように敵は同時に用水推進派農民の空港反対の意を投げ捨てた姿を示さない。彼らは何と合流した反対同盟は、八時過ぎ、熱田さん、小川行動隊長全に制圧した。農民の生活道路に装甲車や放水車が何台も並び、當日の検問の厳しさは幼稚園のスクールバスすらも部族の中に入れなかつたほどである。さいに私服刑事は、ナチス様と共に拳銃をも所持して警備にあつた。

このように敵は同時に用水推進派農民の空港反対の意を投げ捨てた姿を示さない。彼らは何と合流した反対同盟は、八時過ぎ、熱田さん、小川行動隊長全に制圧した。農民の生活道路に装甲車や放水車が何台も並び、當日の検問の厳しさは幼稚園のスクールバスすらも部族の中に入れなかつたほどである。さいに私服刑事は、ナチス様と共に拳銃をも所持して警備にあつた。

このように敵は同時に用水推進派農民の空港反対の意を投げ捨てた姿を示さない。彼らは何と合流した反対同盟は、八時過ぎ、熱田さん、小川行動隊長全に制圧した。農民の生活道路に装甲車や放水車が何台も並び、當日の検問の厳しさは幼稚園のスクールバスすらも部族の中に入れなかつたほどである。さいに私服刑事は、ナチス様と共に拳銃をも所持して警備にあつた。

9月25日～26日

二十六日、未明から小川進さん宅を結集していた支援の仲間も通り過ぎていった。

さん宅前を通る彼らは、反対同盟の銃の批評の声の中で顔をまともに上げることもできず、起草ともに到達する。行く手を擋に阻まれた者も増強された部隊と一緒に構築しよう。

強行着工 不当弾圧に連日反撃

成田用水着工弾劾

強行着工 不当弾圧に連日反撃

し、「一定の方向を明らかに」であります。つまり「努力する」という表現に落ついた。すなはち、連合組織構想を討議した。来年の総会では移行のメドを討議し、来年の総会では移行のメドを明瞭化にしようということです。また国際自由労連への加盟も、当面は各単産が加盟を推進することになりました。「括加盟はなお検討をめぐらす」、「労働者綱領」づくりが一年大きめ踏みだした。十月十日、東京・全連会館において「労働者綱領をめぐる討論集会」を開かれ、共同の力で綱領づくりを推進していく事が確認された。集会の方は、午後一時から五時までという長時間にもかかわらず六十名弱が参加し、熱心な主張、討論が交わされた。開会式では現在の労働運動は戦前戦後のもので一番停滞している。ギリギリのところであるが、来年一月の労働者全国討論集会までに論議を進め、何らかのアーティルにまとめる予定と提案。これを受けるうな形で、横山好夫(金石油)、佐藤芳夫(大日本住友)、

綱領委主催

も問題はないので文章化してほしい。このように五項目補強見解につきては、統労組織をどうつかうのか決断をつけなければならぬが、その他の問題についての文章化を迫られたのである。

九月二十七日に開かれた総評第五回拡大評議員会では、労戦統二の当面のとくみとして、五項目補強見解については、田体間協

の開点合修移統しての開点合修移統する連合体の綱領というべきものの執行するとき、「基本構想」にかかる中に入れてはどうか、といふことじつはうた。そして総評は次へよる宿題をもつてがえつてきただ。①国民春闘の継承発展については取入れることは異議はないが、同盟の實闘の評価もあるべで、その具体的内容について文部化してほし。②全労共闘問題については、共産党をどう扱うのか、まず総評内部で意匠統一をしてほし。③選別排除をするつまらないが、統一労組懇がこのことを問題としているので、これば

正念場迎えた官公労の闘い

民労協三役会議の討議をふり返る。総評としての整理をおこなう。連合体移行について、「それがナショナルセンタ化を意味するなら、一・二・三年間の短期間で移行することはできない。官公労、地域を含めた全的統一の真実的展望とセットで討議されるべきである」という総評内部の原案が、九月十七日の拡大評議會で大きく修正されて提案された。これが「基本構想」に代る基本的なが成される際にとり入れられたのである。

「その結果、連合体移行については、まず第一としての対応をしていく」という確認になってしまった。このように総評は、「五項目強見解の堅持」「全的統一」というこの間芭あせてしまっていった本方針もかななりして、連合移行へと進みはじめた。

総評は分派するのではなく、体へと歩きを運めている。総評の

連合体準備と総評の解体

た第七一回定期大會においても、総労働態勢の強化、集中決戦方式の拡大を唱え、全民労録へ歩みよる方向をうながしている。すなはち、現在を「困難な時代」と把え、総評だけの力ではたたかえないから、総労働の結集を計らなければならぬとして、労戦統一という針路しがないまま、右翼的労戦統一へと進んでいる。

「五項目補強見解の堅持」といつた表現が方針案から姿を消したため、社会党左派系の単連や県評から「五項目補強見解の堅持を明確にして」と迫られたが、真柄事務局長は「五項目補強見解を今まで」と表現しても「態度には變りがない」と答弁し、終つてはいる。官公労を含めた全的統一を急ぐといふことが総評の方針なのである。

待機主義を克服し 攻撃的運動創出を 全国労組連を強 全民労協総会と総評の動向

全国労組連を強化しよう



全国労組連の強化を。写真は東京・東部連絡会6・17反トマデモ隊

民労協化が進むし、総評がまるで

九月一日の日記

西戸組が悪あがき

山谷で再び戦闘始まる

組織する必要がある。國労では民
営・分割反対、余剰人員整理案反
対、六〇・二賃物合理化反対、全
通では深夜勤導入反対、自治労で
は教育監調反対など、具体的なた
かいの方針を掲げていく必要が
ある。そのたかいは、職場にお
けるたかいにとどまらず、下請
を結び、地域の民間労働者の共
闘を形成しなくてはならない。官
公労の反行革のたかいでそれだ
け大衆的にたたかえるが、階級
的労働運動の前進を可能にするか
どうかのカギである。このたか
いの勝敗は、八四年秋から八五年
はじめまでに決することになるで
あつ。

活動家を含めて、いはばらひどいものである。 来年四月には、専売も電気も民営化されるし、国鉄も分割・民営化攻撃が行われて、また右派が執政部をとった全建は、来年の定期大会で全郵政との統合が提案されるであろう。おまけに公労協は解体である。

民労協化が進行し、総評がまるで連合体・加盟する可能性もでてきた。その場合は「二つのケース」が考えられる。ひとつは総評が加盟する連合体参加を決定するケース。もうひとつは、官公労が行軍攻撃で解体され、ほとんどの単産組合が民間組合になって連合体に参加するケースである。いずれにしても連合体の中で総評が主導権をとれると考へてみると、総評指導部の認識の甘さがある。さらには連合体移行が、官公労の統一とは関係なく民間だけでおこなわれる場合もある。このようないことはありえないといふ総評指導部は考へておきたいが、現実にはこの攻撃によるめざぶりがかけられ、結局は行軍によって民労化された公労協が全民労協に参加していく中で、総評は公務員共闘部隊をひとつの中会として認めてくれるようにならぬし、連合体に参加し、自ら解体していくであろう。この危機感が、官公労労働者(ことに新左翼系の)

<p>するためには、戦闘的職場活動家を産業別に地域別に結集させ、統一した方針のもとに組織的な実戦をおこなうことである。特に産別左派結集の組織は、このよみが美義の統一指令部へと飛躍させることが求められている。本部方針を徹底的に批判し、分歧を明確にし大衆的決起をかちり、本部にかわって闘争を指導する部隊の形成である。</p>	<p>第三回、このよみが美義の進行し、またたかいの実践の中から、階級的労働運動の針路を指し示す「われわれの基本構想」、「行動綱領」をつくりあげていかなければならぬ。</p>
<p>第四回、以上のよみが美義の推進母体として全国労組連を強化していくことである。</p>	<p>第五回、党建設を強化し、工場細胞の建設をすめることである。全国労組連を軸とする階級的労働運動を推進しながら、官公労の中に、大手民間、中小企業、日雇労働者の中へ、そして統一労組連合の中にも、わが細胞を建設していくことが必要である。</p>
<p>強固な党の建設をすめるとともに、柔軟にして幅広い統一戦線を形成し、階級的労働運動の前進をかちじぐ。</p>	<p>第四回、以上のよみが美義の推進母体として全国労組連を強化していくことである。</p>

西戸組が悪あがき

山谷で再び戦闘始まる

